

ぷれみあむ
みにっつ

第13集

大きな栗の木の下で
の巻

☆ shiroa ☆

◆エピローグ◆ 大きな栗の木の下で

ギャリリリリリリリィィィ！ けたたましい音をたて、目覚まし時計が鳴った。

俺はまだ疲れがとりきれない体に鞭打ち、起き上った。隣でミユウちゃんはぐっすりと眠っている。

はあ、ちょっとは色気のある話があればいいんだけど。

チョコレートパレスから帰り、泊っていくことになったのだが、ミユウちゃんは冬用の毛布にくるまって寝て、俺は地べたで寝ることになった。「女の子に布団使わせないで、自分だけ使う気?!」と威嚇されたのだ。いや、ちゃんと布団を譲ろうとしたのだ。けど、臭いのだ、べちゃっとするだの文句を言って使わなかったのはミユウちゃんだった。幸い天日干しにしたあと布団圧縮袋でしっかり密閉していた毛布はミユウちゃんの基準に合格したようで、それがなければ近所のホテルでも手配しなきゃいけなかったかも知れない。……俺の負担で。

俺は手早くスーツに着替え、ミユウちゃんに「行ってくるから」と声を掛けたが、爆睡して返事は無かった。ま、いいか。

テーブルにメモを残して俺は会社へ向かった。

今こうして日常に戻ったことが嘘のようだ。まだ頭の中のはじっこの方は麻痺した感覚が残っている。パンダマン、おやじの死。それすらいまいち実感がわかなくなってきた。確かに、俺の腕の中で動かなくなった感触を覚えている。けれども半日ほどしか経ってないのに、そのリアリティは薄れつつある。

案外、あの後弁慶が医者連れて行って、一命をとりとめたとか。そのうち長命寺に行き、弁慶に会ってその後どうしたのか聞いてみよう。

ミユウちゃんと二人きりの夜を思い出すと、少しげんなりする。もしかしたらこんな特別な日なのだから、なにか起きてもいいんじゃないかなあ。そう思ってたのに。ミユウちゃんのセンサーは健在で、俺がチューをしようとする、自動的に正拳突きが飛んできた。体に腕を回そうとしても飛んできた。寝がえりをうって顔が少し近づいただけでも飛んできた。

三度も無意識に殴られると、流石にもう変な気持ちも失せてしまったものだ。俺は諦めて爆睡した。今までの人生で最大の爆睡だったと思う。朝からのピンと張りつめていたテンションが、急に弛んだわけだ。そりゃ一気に疲れがどっとでる。

けど、何かの拍子に夜中の四時に目が覚めて。俺の右腕に温かさを感じた。ぼーっとした頭でよく覚えていないけど、ミユウちゃんが俺の腕にしがみついていたような気がする。

もしかしたらお化けかも知れないし、それ自体が夢だったのかも知れない。けど、俺はそこで安心してまた目を瞑った。夢は見なかった。けたたましい目覚まし時計がなるまで、熟睡していた。

会社に着いたとき、まだ上司は会社にはいなかった。自分のデスクに行くと、机の上にはメモと勤怠届けが置かれていた。

“昨日の休みの申請、有給で書いてさっさと提出しろ”

ほお。昨日のずる休みを珍しく咎める様子は無いらしい。のみならず事後報告で有給を使わせてもらえるらしい。普通有給を使う場合は二週間前に総務に申請するため、それを割り込んでの申請ではたいてい総務にお小言を言われる。上司は俺の為にそのお小言に耐える覚悟なのだ。

ありがたい。いいところあるじゃないか！

俺は勤怠届の有給事由に「急な高熱の為」と適当に書き、上司のデスクに提出しておいた。

今日の仕事の予定を手帳を開き確認する。午前中、悪徳取引先への訪問が入っている。以前納品した商品へのアフターフォローだ。……やな仕事だな。少し憂鬱になる。

俺は朝礼をさぼり、さっそく取引先の事務所に向かうことにした。アポイントの時間まではお腹も空いてるし、コンビニでおにぎりでも買って山里公園で時間を潰そう。計画が決まった。俺は駐車場に行き、自分の車に乗り込んだ。

☆

「どうも、おはようございます」

「おっ、待ってたよ」

悪徳取引先の、陰険部長のお出ました。挨拶もそこそこに、陰険部長はニタニタしたいやらしい、脂ぎった顔を俺に近づけてきた。

「またCパーツが欠品気味になってきたから、頼もうと思ってたんだよ」

「はあ、ありがとうございます」

そのいやらしい顔の裏には、値切り倒してやろうという感情がありありと感じられた。

「今度は三ケース頼もうと思うからさ、どう、どれくらい安くなるの？」

いつものことだから、もう途中の腹の探り合いや交渉などほとんどない。今まで足元をみられていいようにやられてきたのは、痛い。まるで彼女とHをする時の交渉のようだ。はじめはいろんなプロセスを経て、結ばれるはずなのに、何度目かになると、「なあ、今日いいだろ」とあらゆるプロセスを省略して行為に至る。……っていつても俺にはそんな経験ないんだけど、まあそんなものなんだってことはなんとなく想像がつく。

いつもだこの交渉が決裂することが恐かった。だから穏便に済ませようとした。けど、今日はカチンときた。

「安くなりません」

ぴしりと言った。陰険部長は鳩が豆鉄砲をくらったような、間抜けな顔をした。

「へ？ 安くならんということは、商売しないってことかい」

すぐにまたにやにや顔に戻り、陰険な交渉モードに突入したようだ。

「商売しないとは言っておりません。これからは定価で購入いただくかと思っております」
「そんなアホな話ないだろう。だっていつも頼んでいるお得意先だろ。お宅だってそんなに大きな会社じゃないのに、うちとの取引が無くなれば厳しくなる。そんなことわかってるはずじゃないか。ちょっとの値引きくらいお得意様にはしてもいいんじゃないの？」

“様”という言葉が気に入らなかった。自分は偉いんだ、大事にしろよ。そんなニュアンスをありありと感じられた。こっち側への感情の配慮なんてありはしない。なぜだろう。いつもの交渉ではそんなこと感じなかったのに。今日は意地でもひく気になれない。

「そこなんです。今まではお得意様ということで大幅に値引きして対応しておりました。しかし先日上司に叱られまして。この間のような割引率では原価を割ってしまうのですよ」

「それは知らないよ！ お宅がやるって言うてくれたから、それで頼んだんだから。原価を割るんなら、あとはお宅の企業努力でしょ。原価を抑えるなり、生産量を増やすなり、取引先を増やすなり。それをうちに言われても困るわなあ」

詭弁だ。とことんまで引かせたのはこのおやじだ。弱気で交渉する俺をいいことに、半分脅しのような態度で俺に契約させた。

恐かった。目の前の陰険部長も、頭の禿げあがった上司も、会社から追われることも。

だから、穏便に。契約をとるならばどうあれ結果契約をとって帰らないといけないと思ってた。

「定価と言っても別にスーパーで売っている一般消費者向けの商品とは違います。当社のは適正価格で設定した定価です。この価格で目標の販売数がクリアできないと、当社としても経営の維持が難しいんです。Cパーツが必要なのなら、定価で契約いたしましょう」

毅然と言った。さすがに陰険部長もいつもの俺と違うのを察した様子でひるんだ。が、その後怒鳴り出した。

「いっかいのサラリーマンが生意気ぬかすな！ あんたが入社する前からうちはお宅の会社とは長い取引があった。信頼があった。そのうえで今も取引を続けてるわけだろう！ うちとの取引がなくなれば、あんたは上司に、いや、社長の顔に泥を塗ることになるぞ。そのうえで、リストラ。わかってんのか！」

脅しだ。今まででもっとも激昂した脅しだ。

しかし、まったく恐くなかった。

死線を乗り越えてきた俺には、表面上の去勢、凄みが、ただの振りにしか見えなかった。エロスの淡々とした静かな言葉に比べれば、どうったことはない。リストラ？ それがどうした。死ぬわけではない。

「私がりストラされるのと、値引きすることは関係ないでしょう。どうします？ Cパーツの注文は無しにしますか。無くても製造は間にあいますか？」

陰険部長は在庫管理が下手だ。だからいつも急いで注文し、急いで納品させる。お得意先だから、無理を聞いてきたわけだ。

が、裏を返せばそれはこちらの武器になる。注文を拒否すれば困るのは取引先であり、すぐに納品せずに困るのは取引先だ。

「何を？ 今度は脅しか？」

脅してきたのはオタクが先だ。

「いえ、交渉でしょう。これは」

あくまで冷静に応える。ふつつつとした怒りの為か、声が張っているのには自分で驚いた。

「バカ！ こんな一方的な交渉あるか！ 定価で売る、相手が困るのが判れば、それにつけ込む。これで営業職が務まると思ってるのか」

それをやってきたのは、お前だ。

「どうしましょう？ 今日私が伺ったのは、先月納品のAパーツに不備が無いかのアフターが目的だったので。特別Cパーツの注文は予定にありませんからね」

「よしよし、よくわかった。もう注文しません。Cパーツはよそで頼みます。これからはAパーツもBパーツもお宅には頼みません。取引終了。あんたのリストラだけで済めばいいけど、会社傾けて自殺者が出たら、まあ夢見が悪いと思うけどなあ」

俺はその言葉を聞き、がっかりした。Aパーツは良いとして、Cパーツはこの取引先から依頼を受けて製造した特注品だ。他の製造会社に依頼をして出来上がるのに短くて三カ月はかかるだろう。今欠品しているパーツを三カ月もほったらかして製造ラインをストップさせる。その責任をとらされるのはこの陰険部長だ。

そんな責任をとるような男では無いことを俺は重々承知している。俺がCパーツの成り行きを知らないとも思っていたのか？ そこまでなめられていたのか？

「わかりました。では、これで失礼します」

俺は回れ右をして帰ろうとした。やれやれ、この後は上司に大目玉だ。怒られるのは嫌だけど、もうどうでもいい。別に、恐くない。

俺が扉に手をかけると、陰険部長が「待て」と言った。

「まいった、降参。負けたよ」

俺がふりかえると陰険部長は泣きそうな顔をしていた。本当にCパーツの欠品具合が深刻だったのだろうか。

「Cパーツ注文するから、こっちに座って書類を出してくれよ」

いまいち俺はこの状況が理解できなかった。交渉に、勝った?! ちょっと嬉しい気持ちが胸のうちに湧いてきた。

「わかりました。Cパーツは作り置きがあるのですぐに納品できるでしょう」

俺は席に座り、契約をすすめた。

書類の最後、印を押す際に陰険部長はぼそつと言った。

「……ちょっとは、まからない？」

「駄目です」

俺は笑顔で言下に却下した。

☆

会社に戻り、上司にCパーツ受注の報告をすると、目を丸くして俺を誉めてくれた。

「おい、本当かい？ やるじゃないか！ 偉い！ これで次からはちゃんと定価で取引ができるぞ！ やればできるじゃないか！」

「あ、はい。ありがとうございます」

上司がこんなに喜んでくれるとは思わなかった。いつも小言ばかりいう嫌な上司だと思っていたけれど、根は悪い人ではないのかも知れない。

そういえば昨日の昼ごはんは、巡り巡って上司からおごってもらったことにもなる。

「そうそう。昨日は何か事情があって休んだみたいだけど、今日はきっちり出勤してきて安心したよ。できるだけ事前に報せろよ、休む時は」

その言葉をきき、少しぐっときた。

「はあ、すいませんでした。もう多分、こういうことは無いと思いますから」

多分、上司は気付いたのだ。俺が昨日駐車場の車を取りに来たことを。

朝から変な電話をかけ、会社に置いていた車は取りに来ている。けれども会社に顔を出していない。別に俺が病気でどうのとか、そういうことでは無いのは判っていたはずだ。携帯電話の番号だってわかるはずだから、ずる休みを咎めようと思えば、いつでもできた。けど、しなかった。

許してくれてたのだ。

上司は上機嫌に笑って言った。

「青空研究ってね。俺の昔の仕事のできる先輩が良くいっていた。ある日朝起きてふと仕事に行きたくなくなるんだってさ。そしたら会社に連絡もせず、ぶらぶらとその辺を散歩する。そしたら、ふといいアイデアが思い浮かんでさ、突破口が見えなかった仕事もうまくいくんだって言っていた。まあ研究ってゆうか、ただのずる休みだけさ。

この話にはね。仕事にはリラックスが大切だ、ということと、問題意識を常にもたないといけない、という二つの教訓が含まれているんだ。休みの日でも仕事を忘れちゃいけない。常に仕事のことを考えていないといけない、っていう堅苦しい話じゃない。仕事でなかなか突破口が見つからない難しい問題を、どうしたら解決できるんだろうと、頭の片隅に置いておきながら、普段の生活をリラックスして過ごしなさいってことだよ。

いや、昨日の休みの翌日で、こんな実績上げてきたもんだから、俺も思わず先輩の事思い出しちゃったよ。はっはっは」

まあ、別にのんびりずる休みを楽しんでいたワケではないんだけど。特別昨日の事情に関して言及する様子もないし、適当に俺は「そうっすね」と相槌をうっておいた。

嫌な奴、そんな印象が不思議と消えていた。おととい飲み会の後、妖怪人間とあだ名をつけた

けど、撤回しよう。

そして、“輝ける額”と心の中で呼ぶことにしよう。

☆

それから一週間と少し経った頃、俺のアパートに弁慶から葉書が届いた。

“相見えたし”

と簡単に書かれていた。会って話がしたい、と伝えたいのだろう。手紙に書かれてる言葉が、日本語として本当に正しいかはよくわからないけど。今頃になり、もしかしたら弁慶は昔の言葉をわざと無理やり使っているのかもしれないと思えてきた。

江戸時代にレーザーディスクなんて存在しなかったし。思い返せば無理やりこじつけたように感じられる言葉ばかりだった。

葉書の差しだし人住所は“長命寺”。俺は次の土曜日の休みにでも顔を出してみることにした。

長命寺の境内は朝から弁慶によって、綺麗に掃き清められていた。すこし肌寒い風の冷たさと、眠気が醒めきらない脳に射さず爽やかな太陽の光によってか、常世の景色に感じられない。夢幻の中にいるかのような錯覚を覚えた。

静かに、しかし力強く竹箒を操る男の姿は美しかった。

「おお、これは隼人殿。ご足労感謝いたす」

弁慶は俺に気付くと気さくに声をかけてきた。

「いえいえ。先日は大変お世話になりました。お手紙読んで来てみました」

俺は階段の最上段から答えた。はじめて来た時も感じたが、美しく整ったものを破壊するのは躊躇してしまう。

「もそっと傍にこられよ。遠慮する間柄でもあるまい」

そう言って弁慶は自ら俺に近づき、その美しく整った幾何学模様を崩した。俺はようやくほっとして境内に足を踏み入れた。

「今日ご足労願ったのは他でもない、父君の弔いについての話を伝えようと思った次第でござる」

パンダマン、俺の親父。その亡骸をどうしたか、ということか。

「すいません。すべてお任せして。本当であれば家族である自分がやんなきゃいけないことのように」

「仏門に下ったのも何かの縁。隼人殿の父君に会ったのも何かの縁でござる。此度は特に尋常ならざる事情故、浮世の法では裁けぬ仕事と身受けたし。それがしの使命はこの為であったかも知れぬな」

そう言って声高に笑った。とてもチョコレートパレスで大怪我をしたとは思えない元気っぴ

りだった。

「弁慶さんは怪我の方は大丈夫なんですか？」

「心配無用の助でござる。あんなのかすり傷でござる。飯を喰って寝れば治る類の軽傷、大袈裟に案ずるに足りぬでござる」

この様子だと病院にいったいな、きっと。恐らく銃弾は太ももに埋まったままだ。ま、いっか。弁慶なら大丈夫だろう。俺も手には鉛筆の芯が埋まってるし。

「相変わらず頼もしいですね。ところで、オヤジはあのあとどうしたんですか？」

弁慶が俺の肩をぽんと叩いた。そして裏山の方へ指をさして言った。

「父君の元へ参ろうか。道すがら、過程は説明しよう」

俺は大きな手のひらの衝撃に、改めて弁慶の強さを感じ、畏怖を感じた。絶対機嫌を損ねること、できないな。

弁慶は裏山の細い獣道のような場所を先導して歩き、チョコレートパレス以後の事を教えてくれた。実に解説難解な日本語だったが、俺が理解した内容を要約しよう。きっと八割がたは合っているはずだ。

チョコレートパレスを出て、弁慶はオヤジを背負い長命寺へ帰った。運ぶ際は圧迫止血を行い、血が垂れないようにしたらしい。翌日寝袋に入れたオヤジの亡骸を、知り合いの火葬場へ持っていき、特別に焼いてもらったという。本当は申請やら許可やらが必要らしいが、弁慶のコネというやつで無法でやってもらったらしい。……弁慶じゃなきゃできない芸当だろうな。そして灰と骨になったオヤジだったが、骨もゴリゴリと砕いて灰にして、それを供養塔の下に埋めたという。

「ついた。ここに父君は眠ってるでござるよ」

目の前には何百年前からそこにあるのだろうと思わせる、風化した△、○、□の石塔があった。おでんみたいだと思ったが、口にするのは自粛した。

「無縁仏はこのような供養塔にて弔うことがある。それがしもこの五輪塔がそもそも誰の物なのか、なんの為の物なのか知らぬが、父君を静かにひそかに弔うには、ここがちょうど良いかと思ったでござる。ここならそれがしも近くにいて供養ができる」

弁慶の声は優しくかった。すごく、温かかった。

「ありがとうございます。俺も、時々ここにきていいっすか。何も出来ないっすけど、手を合わせに来るくらい、いいっすか」

「もちろん。高価な墓石を建て、それをほったらかしにするよりも、まめに足を運び手を合わせる方が、どれだけ故人への弔いになるろうか。その心が大切でござる。常に、心の隅に忘れずにおかれよ」

俺は手を合わせ、祈った。

“オヤジ、今度は俺が、自分のプレミアムニッツを見つけるな。絶対、生きてて良かったって思える人生にするな”

木に囲まれ、あまり人が踏み入れない静かな場所。夏にはこの供養塔さえ覆うくらい雑草が生い茂るかも知れない。でも、そんな場所がオヤジらしくも感じた。

忘れないよ。また、来るよ。

「弁慶、本当にありがとう。きっと、オヤジも喜んでる」

「では、参るか」

俺と弁慶はひっそりとした秘密の墓所を後にした。

「俺、ひとつだけ心配なことがあるんすよ」

境内へ戻る道すがら、俺は自分でもびっくりするくらい気弱な声で言った。

「なんでも相談されよ。どんとこいでござる」

「雲運運団はいいとして、朝真会館が復讐したりしてこないか。なにせ宝くじが手に入らず、チョコレートパレスの借金が払えないみたいだし、幹部のエロスはやつつけちゃったし」

「心配はいらぬでござる」

弁慶がそういうとほっとする。けど、その根拠は？

「そもそもエロスは父君を殺している。朝真会館としては十分な負い目でござろう。こちらはエロスをやつつけたが、殺しはしておらん。また、チョコレートパレスの借金でござるが、それがしと館長でサラ金へ乗り込み、金利を下げ、返済期日を延ばすよう交渉済み。裏稼業での稼ぎがあるから、現実的に返済が可能でござれば、館長もこちらへ復讐の目を向けることはあるまい」

何やらちゃんと根拠があって、心配はいらないらしいけど。へ、館長と一緒にって？

「それがしはあの日の翌日、チョコレートパレスへ一人で行き、館長と話をつけてきたでござる。館長はそれがしの心胆を気に入り、また武を認めてくれ、どうしても朝真会館の特別顧問として顔を出してくれぬか、と頼まれたでござる。それがしは今回の件は水に流すということを条件に、承諾したのでござるよ」

「ええと、つまり弁慶は朝真会館の一員で、館長と友達で、話がついてるから、俺が復讐に遭うことはないってことですか」

「まあ、平たく言えば、そういうことでござろう。はっはっは」

なんて豪快な解決だろう。これも弁慶ならではだと思った。

☆

俺は遅めの夕食にファミレスにやってきていた。

ミユウちゃんがオーダーを取りに来てくれる。ミユウちゃんはその後新しい就職先が決まるまでファミレスでバイトをすることにしたらしい。

「いらっしやいませ」

そういうと、ミユウちゃんは俺にメニューを渡すことなく、手の電子オーダー……正式名称は

知らないが、それにピッピと入力し、去っていこうとした。

「あ、ちょっと、ミユウちゃん」

俺が呼び止めると、「ドリンクバーついてるから大丈夫」と言って立ち去った。

ま、いっか。ファミレスの制服姿を見ることが出来たし。本当、どんな格好しても可愛いなあ、ミユウちゃんは。

しばらくしてミユウちゃんは料理を運んできた。

「お待たせしました。お子様ランチです、とこのポテトフライはあたしの分」

へ？ 俺はそのまま凍りついてしまった。それを余所眼に「じゃ、もうあたし上がりだから食べて待ってて」と言っていなくなった。

俺は硬そうなハンバーグを箸でつつき、これはどうしたものかと思案した。別のスタッフを呼んで違う料理を注文しようか。でも、そんなことをミユウちゃんが知ったら、後で鉄拳を食らうだろう。とりあえずお腹も空いていたので小さなハンバーグを半分に分けて食べてみた。じつにぱさぱさしたジューシーさのかけらもないハンバーグだった。

周りの客が俺を凝視している気がした。大人のくせにお子様ランチを頼んでるわよ。そんな声が聞こえてきそうだった。女性の笑い声が聞えたが、まるで俺を嘲笑しているように感じた。…なんでもこんなつらい思いをしないといけないんだろう？ 俺はなるべくはやく食べきってしまおうと箸をすすめた。

と、そこへ私服姿のミユウちゃんが戻って来た。

「これ、オモチャ」

多分お子様ランチにつくおまけだろう。ミユウちゃんは見るとにちゃちいトランプを俺に渡した。

「ありがとう。けどミユウちゃん、なんで俺にお子様ランチ持ってきたの？」

ミユウちゃんは向かいに腰掛けながら答えた。

「それはあたしの使命だからよ」

へ？ 訳わかんないっす、ミユウ先輩。

「どうして大人はお子様ランチを食べちゃいけないの？ 料金を払うならば食べたって構わないじゃない。あたしにはお子様ランチの量がちょうどいいし、少量ずついろんなおかずも用意されていて楽しめるし。おもちゃもついてるし」

でも今日、ミユウちゃんは自分用に頼んだ料理はポテトフライだ。

「あたしはお子様ランチに革命を起こすために、ファミレスでバイトすることにしたの。だからハヤトに協力してもらったってわけ」

協力？

「既成事実。少しずつ大人がお子様ランチを食べる姿が増えていけば、今は不自然でもそのうち自然になるでしょ。あたしが食べても子供がお子様ランチ食べてるようにしか見えないから意味無いじゃない」

それはごもつとも。でも、さすがミユウちゃん、飛躍した考えの持ち主だ。

……うん、魅力的だ。

「よかった。こんな俺でもミユウちゃんに協力できて」

なんか悲しくなってきた。けど、いいんだ。俺がどんなに恥ずかしい思いをしても、ミユウちゃんの役に立ててると思えるなら、俺はそれに意味を見いだせる。

「で、宝くじカンケーで話があるっていったけど、何？ 換金の話？」

ミユウちゃんは両目をらんらんと輝かせて前のめりに俺を見つめた。期待されている。俺は苦虫をかみつぶしたような顔をしてたんじゃないかと思う。頬を変にゆがめて、おし殺すような声で言った。

「残念だけど、無効になったんだ。明日から引き換え開始のはずだったけど、今朝ニュースで不正発覚が分かったって話で、再抽選することになってね」

「ええ！」

ミユウちゃんはすごく判りやすく肩を落として落胆した。

「あたしの苦勞が、苦勞が……水のアワかあ。あたしはカヨワイ人魚姫なのね」

人魚姫が泡になったのは、また別なワケな気がしたけど。まあいっか。

「雲運運団の仕業じゃないかな、と思うんだ。おそらくね。自分たちで工作した一等だけど、自分たちで換金することが出来なくなった。じゃ、意味がないし、奪った俺たちがそのお金を手に入れるのも面白いワケない。工作した本人が告発したから、こんなグッドタイミングで発覚したんじゃないかな。できすぎだもんね」

俺はなんとなくこうなるんじゃないかと思っていた。あんな事件に巻き込まれて、死ぬかも知れない目に遭いながら、なんの報いもないなんて損かもしれないけれど、そんなくらいで億という金が手に入るとも思ってなかった。簡単に手に入るということは、簡単に失う可能性もあるんだ。なんとなく、そう思った。

つらいのは、ミユウちゃんがこの事実を知り、失望するかも知れないということだった。けど、考えていた以上にミユウちゃんはプラス思考だったようだ。

「じゃ、しゃーない。次の宝くじ買って、それを当てよう！」

そういうとベルを鳴らし、スタッフを呼んだ。

「ハヤト、今日はやけ食いするから、ヨロシクね。まずはお子様ランチと、ビール」

なんだその組み合わせは。……よろしくって、俺に出させる気？ けどま、それくらいでミユウちゃんの気が晴れれば安いものだ。

「わかった、好きにして」

女子高生くらいの女の子がオーダーを取りに来た。

「あれ、美優先輩。もしかして彼氏ですか？」

「ちやう、ただの幼馴染み！」

ミユウちゃんは即、強い口調で否定した。

お子様ランチとビールという奇妙な注文を入力し女の子が去っていくと、ミユウちゃんは俺に向きかえり、「ところで」と言葉をついだ。

「あの日さあハヤト。あたしが寝ている間に変なことしなかった？」

あの日、変なこと？

「あの、夜に泊ってた日のこと？ 泥のように眠ってたからなあ。別に何もしてないけど。ど

うして？」

ミユウちゃんが眉間にしわを寄せ、前のめりになり、顔を俺に近づけた。

「セーリがこないの。心当たりはあの晩だけ。だからと思って」

ぶっ、と俺は鼻からコーンポタージュを噴き出した。

「まさか！ だってミユウちゃん寝てる時ちよっかい出そうとすると、殴るんだもん」

「ちよっかい？」

ミユウちゃんの目が鋭く光った。

しまった！

「だってさ、女の子が隣で寝てたら、ちよっとはなんか、そんななっちゃうだろ？」

俺は慌てふためき弁解する。ミユウちゃんは訝しげな目で俺を見ている。

「誤解だよ、結局殴られたから何もせずに朝まで寝てたんだよ。信じてよ」

「そんな話が信じられると思う？」

頬を膨らませ、腰に手をあてるミユウちゃん。

「どうしてカヨワイ女の子が、寝ている無意識の間に殴ったりするのよ」

その理由は、俺の方が知りたい。

「信じられないかもしれないけど、事実なんだよ」

ドン、とミユウちゃんがテーブルを叩く。

「それに今までに一度だってあたしがハヤトのこと、殴ったことある？」

あの日夕方、アパートに戻った時、降り出した雨の中俺は殴られ仰向けになっていた。あの時のミユウちゃんは間違いなく覚醒してたけど。……今このタイミングでそれを持ち出しても火に油を注ぐようなものだろう。俺はぐっと言葉を飲み込んだ。

「ごべんなさい」

ふう、とミユウちゃんは溜め息をついた。

「起きたことはしかたないわよね。じゃ、そういうことでハヤト。あたしにちよっかいだしちゃったんだから、きちんと責任とりなさいよね」

へ？

「もし赤ちゃんが生まれたら、私生児なんてあたし嫌だもん。かわいそうでしょ」

はあ。なんか、意外な展開だ。間違いなく俺はちよっかいを出してないし、恐らくただ生理が遅れているだけと思われるが、結果的には俺にとって嬉しい展開になった。思い続ければ、通じるって本当なのだろうか。何年かかったろう。好きでい続けて、良かった。

「そ、それじゃ、ミユウちゃん。俺と、付き合ってくれるかい」

「拒否します」

ええっ！ 俺は開いた口がふさがらなかった。まさにその言葉が出るのを待っていたかのよう

な綺麗なタイミングでミユウちゃんは即答した。なんどもセリフ合わせをして本番に臨む舞台俳優のようだった。

「責任をとることと、付き合うことは別問題よ。だけど……」

ミユウちゃんのお子様ランチが運ばれてきた。お子様ランチを前にしたミユウちゃんは、似合すぎるほど似合っている。そしてその隣に屹立する生大のビール。普段ならアンマッチに感じられるナンセンスな組み合わせだが、不思議と調和していた。ミユウちゃんの個性を端的に表現しているように思えて。

……ところで、どうして生大がきてるんだ？ 確かにビールを頼んでいた記憶はあるけど。ミユウちゃんが“ビール”といえば、この店では生大のことなのだろうか。まあ、いいや。

スタッフの女の子が立ち去ると、ミユウちゃんはちょっと声のトーンを下げて、伏し目がちにこうこぼした。

「あたしのこと、好きじゃなくなるのは、許さないから」

か一と自分の顔が赤くなるのが判った。

今はまだ付き合わない。

それでもいいや。

この気持ちだけ確認できれば、俺は十分幸せだ。もしも宝くじがそのままお金に換金出来て、大金持ちになれたとしても、きっと今のような幸福な気持ちにはなれなかったと思う。

本当のところは人間現金なものでわからないんだけど、今の瞬間は、そう感じたんだ。

☆

給料が入ったので、俺は母親が住むアパートへやってきた。毎月、二万円を仕送りしている。

「あら、いらっしやい」

母は陽気な笑顔で迎えてくれた。お金を差し出すと、「いつも悪いわね」と言って嬉しそうに受け取った。

築何年だろう。古い建物のアパートだ。これから迎える冬を考えると、凍えないか心配になる。

「お茶でも飲んできなさいよ」

いつもはすぐに帰るところだけれど、俺は「うん」と頷いた。

「今ね、そこで栗を拾ってきてね、ゆがいてるところよ。食べていくといいわ」

「拾ってきたところ？」

「ほら、下の栗の木。いっぱい落ちてなかった？」

確かにアパートには大きな木がシンボルツリーのように立っている。まったく気に留めたことがなかったが、栗の木だったようだ。

「気付かなかったよ」

俺は狭い六畳の間に入ると、丸いちゃぶ台を前にして座った。座布団もないので、どこに座ったらいいか分からなかったが、一応テレビに対し時計回りで四時の位置に座った。お勝手からお茶を運んでくるのが九時の方向なので、邪魔にならないだろうと思った。

母はお茶を淹れると予想通り八時の位置に座り、テレビをつけた。テレビでは昼のワイドショ

一が流れていたが、特に母は興味は無いようだった。映像つきBGM。そんなところだろう。

「栗ももうすぐできるからね。さつき虫が出てきて驚いて笑ってたのよ」

母は陽気だ。つらそうな顔を俺に見せたことは、心に残っているので一度だけだ。俺が高校を卒業し、家を出る時だった。会社の社宅へ引っ越す日、見送る時の顔。オヤジが家を出ていった時ですら、そんな顔をしてなかった。

「ところで気になったことがあるんだけど。アパートの敷地に植えてある木だったら、その栗って大家さんの所有物になるんじゃないの？」

母は楽しそうに笑った。

「あなた気になったことがあるって、栗が木に生るのとかけていったのね。おかしい」
違うよ。

「別にいいじゃない。アパートの家賃はきちっと滞納せずに払ってるんだから。栗は年にこの時期だけの福利厚生サービスみたいなものよ。怒られたことないし」

「いや、その怒られるか怒られないかが基準じゃなくてさ」

まるで子供の論理じゃないか。

「ところであんた、ちゃんにご飯食べてる」

「食べてるよ」

「外食ばかりになってない？」

「なってるよ」

「野菜ジュースでもいいから、ちゃんと野菜摂りなさいね。将来困るんだから。ほら、テレビのあれ、あの有名な栄養士の人もこの番組で言ってたわよ」

きっと名前までは覚えていないのだろう。忘れっぽいというより、興味がないから覚えてない、と思いたい。

「わかってるよ。ちゃんと気をつけてるよ」

すっと母が立ちあがった。

「おっと、そろそろいいかな」

お勝手のガスコンロの火を止め、お湯をシンクに捨てる。白い湯気がこっちの部屋まで侵入してきた。

「まだ熱いかも。気をつけて食べてね」

母は果物ナイフを二丁、ちゃぶ台に用意して、その後にざるに盛った大量の蒸し栗を持ってきた。ざるの下には皿を添えた。

なんでこんなにたくさん一気に作るのだろう。食べる分だけ作ればいいのに。

俺はナイフで栗を半分に切り、前歯を駆使して中身をほじくって食べた。母は立ちあがったと思ったら、自分の分のスプーンを用意して戻って来た。そしてひとつ食べ終わると、「あれ、あんたはスプーン使わないの？」と言った。

「ああ、前歯で食べるの慣れてるから」

なんとなく俺もスプーンを待っていたのを気取られるのが嫌で、強がりを書いてしまった。…お陰でこの後も前歯で食べなきゃいけなくなってしまった。まあ、いいや。あと食べても二

三個ってところだろうから。

「久しぶりね、こうして一緒に食べるなんて」

「うん」

毎月仕送りは持ってくる。俺が社宅を出て今のアパートに移ってからは、母のアパートとも近くなった。いつでもこれる。その安心感からか、顔を月に一度合わせても、一緒に食事に行ったり、時間を共に過ごすことはほとんどなくなっていた。

またの機会に。そう思っているうちに何十カ月と経っていた。

「まったく、あいつはどこにいったのかしらね」

母は少し怒った口調で言った。視線は窓の外の白い雲に向いていた。

「へ？ あいつって？」

「お父さんよ。一向に帰ってきやしない。今頃どこで何をしてるんだか」

オヤジは母とは連絡をとっていなかった。俺はたった一度だけ、切手のないオヤジからの手紙が届いた。就職した時だ。その手紙には『困った時にだけ連絡しろ』という威圧的な文章で文字が書かれており、携帯電話の番号が下手くそな字で添えられていた。

携帯電話に登録したが、俺はその番号をかけたことは無かった。あの日、確認の電話をする時を除いて。

「どこにいるんだろうね」

「あいつ、いつも夢ばっか語ってたから、今でも子供みたいに夢を追ってるのよきっと。で、夢をつかんだら帰ってくるって思ってる。けど、ぜんぜんその夢をつかめないもんだから、帰って来るにこれなくなってるのよ、きっと」

驚いた。母は俺が思っている以上にオヤジの性格を把握している。そう、オヤジは成功すれば、俺たちを迎えに来ようと思っていた。そうなんだ。

「……」

俺は黙ったまま、もくもくと栗を食べていた。何も母に答えられなかった。もうオヤジは帰ってこないよ、なんて。とても伝えられなかった。

「帰ってきたら、ぱんちね。よし、ぱんちの練習しとかなきゃ」

母は嬉しそうにこぶしを握り、へたっぴなジャブを「しゅっしゅ」と言いながら繰り出す。

「あんたも大人になったんだから、お父さん帰ってきたら殴りなさいよ」

ぶっ、と鼻に咀嚼された栗とそれに混じった唾液が逆流した。

「なんだよそれ」

慌ててチリ紙を三枚とると鼻をかんだ。それを見て母はげらげらと笑う。

「よし、あいつが帰ってきたらもっと驚かそう。そうだ、あんた早く美優ちゃんと結婚しなさい。中学生の時好きだって言ってたわよね」

変な情報をよくいつまでも覚えているものだ。うちに遊びに来たこともなければ、母とミユウちゃんには全く接点が無かったはずだけど。卒業アルバムに写った写真のイメージしかないはず。

「うん、まあ、好きだけど。なかなかね。先方の気持ちってやつもあるからね。こればかりは」

「じゃ、他の子はやく探しなさい。二十歳すぎて彼女の一人もいないなんて淋しいわよ」

それはさ、そうなんだけど。

「はいはい、努力します」

もうオヤジは戻ってこない。けれど、母はずっと待っている。いつか、夢をつかんでオヤジは帰ってくると。母は、信じている。

俺はおでんのような供養塔を思い出した。いっそ、このアパートの大きな栗の木の下に父の灰を埋めてあげた方が良かったのかもしれないな。その方が、母にとっては幸せだったのかもしれない。きっと、オヤジにとっても。遠く離れている、どこにいるかわからない。けど、実はずっと近くにいる。

「あれ、隼人。どうしたの？」

俺の頬を涙が伝った。

なんでもないよ。

なんでも。

声は、頭の中で言葉にならず、消えていった。

了

あとがき

しろあです。

いかがだったでしょうか？ ぷれみあむ・みにっつ。

作品の構想から書き始めまで約1年。

だいたい話が固まり、さあ書こうと思った時に映画「ゴールデンランバー」との出会い。
この映画を見ていなかったら、ここまでふっきれた作品になっていなかったかもしれません。

もともこの映画のコンセプトは矢口史靖監督の「アドレナリン・ドライブ」を昔見ている、
そのうちこんな面白い逃亡劇が書けたらいいなあと思っていたことが発端になります。

けど、純文学志望（！）の自分がコメディを書くことはないだろう。

そう思って、ずっと封じていたんですね。

そしてある時、なんかふっきれたんです。

すごい笑える、ナンセンスな、面白い小説を書いてみよう！

ノリで楽しんで書けるといいなあ！

どちらかという、いつも重たい話ばかり、特に長編が多かったですから。

遊びのつもりで書いてみたんです。

書き始めたら、まあ楽しくて。

最終的には「小説現代長編新人賞」の第一次審査突破という快挙まで。

ノンジャンルで募集している文学賞ですが、まさかこの小説で?! と思いました。

それだけ下読みサンにも楽しんでもらえたんでしょうね。

「この文学賞で大賞は、対象が違うから無理だけど、面白かった。頑張れ」

そんな声が聞こえてきました。

そんな、私にとって、いろんな意味で忘れられない小説になりました。

いままで創作を続けてきましたが、この作品をこうして発表で来ただけでも、

また、読んでいただける方に恵まれただけでも、やってきた甲斐があったと思っています。

今は創作より、ライターとしての仕事をせかせかやっていますので、しばらくはパブで本を発行することはないと思います。

また、面白い作品が書けたら。
上梓したいと思います。

ありがとうございました！